平成２０年度自治体国際協力促進事業（モデル事業）

日本庭園（サギノ一徳島友好庭園）の維持管理向上のための造園技術協力事業

徳島市（徳島県）

１．はじめに

昭和 36(1961)年、徳島市とサギノー市（米国ミシガン州）は、姉妹都市提携を行った。

昭和 45(1970)年、サギノー市において、日本庭園（サギノー徳島友好庭園）の建設が計画され、同年３月には、庭園建設のため、徳島市からサギノー市に雪見灯籠、春日灯籠、青石、あずまやなどを贈り、同年７月から 10 月までの間には、徳島の造園師がサギノー市を訪問し、日本庭園の建設指導にあたった。その結果、昭和 46(1971)年６月にサギノー徳島友好庭園が開園に至った。

そして、その後昭和 53(1978)年８月には、サギノー市から徳島市へ友好庭園の土地の２分の１(1,630 ㎡)が寄贈され、この両市の土地の活用を検討した結果、サギノー市民に日本古来の伝統文化である茶道を通じて、日本文化を理解してもらうため、両市民が主体となって寄付を募り、数奇屋造茶室「阿波鷺能庵（あわさぎのうあん）」が建設（昭和 61(1986)年５月開設）されるに至った。

以上のように、サギノー市の中心部に位置するこのサギノー徳島友好庭園は両市の共同所有であり、またその上に建設された茶室「阿波鷺能庵」においても両市民の理解と努力のもと建設されたものである。

２．事業実施に係る経緯

サギノー徳島友好庭園は、茶室「阿波鷺能庵」とともに、今日サギノー市民だけでなく、近隣の都市及びミシガン州の人々によって、真の日本文化が体験できる場所として重要視されており、またこの庭園は訪れる人々に癒しと安らぎを与える場所としても注目されている。

サギノー徳島友好庭園は、自然庭園部分と日本庭園部分とから構成されており、自然庭園部分は、自然湖、大きな木々そして一面に敷かれた美しい芝生からなっている。

そして、その自然庭園部分を分け入って進むと、日本庭園部分であるロックエリア（石組）、滝口から自然湖へ流れ出る小川、そして茶室「阿波鷺能庵」とともに日本庭園の中核となる茶庭へとつながっている。

この友好庭園は建設されて 37 年という歴史があり、この長期間における手入れはサギノー市、サギノー市民によって行われ、その手入れは大変行き届いたものであり、とてもきれいに整備されてきた。

しかし、日本庭園部分については、日本の造園の知識と技術をあまり持たないまま、米国の造園の知識と技術に基づき、日本庭園の維持管理が行われてきたため、当初この日本庭園が備えていた日本らしさ、日本の美が薄れつつあるという現状であった。

米国の造園技術は大変素晴らしいものであり、日本でもその技術が多く取り入れられているが、日本庭園の維持管理には、日本の造園技術とその造園における根本的な考えや知識が欠かせない。

そして、この友好庭園は、茶室とともに『真の日本文化を発信する拠点』としての役割を担うことが大いに期待されており、今後もサギノー市において、この友好庭園が「日本庭園としての本来の美」を平素から維持できるよう努めていかなければならない。

よって、徳島市から熟練した造園師を派遣し、日本の造園技術と日本庭園の美の構築の概念についての基礎的な研修指導を行い、常に「日本庭園として日本の美」を現地スタッフが表現できるよう、日本庭園の維持管理における造園技術の向上に努めた。

３．事業概要

⑴　日　程

派 遣 期 間：平成 20 年 9 月 20 日～9 月 26 日（５泊 7 日間）

研修実施日：平成 20 年 9 月 22 日～9 月 24 日（3 日間）

月　日	日　　程
9 月 20 日	徳島市から関西国際空港・デトロイト経由でサギノー市へ。 サギノー徳島友好庭園の下見
9 月 21 日	サギノー徳島友好庭園の下見と打合せ・資材の調達
9 月 22 日	午前：講義　－茶庭について－ 午後：サギノー徳島友好庭園で造園技術の指導
9 月 23 日	終日：サギノー徳島友好庭園で造園技術の指導
9 月 24 日	終日：サギノー徳島友好庭園で造園技術の指導
9 月 25 日 9 月 26 日	サギノーからデトロイトへ。 デトロイトから関西国際空港経由で徳島市へ。

⑵　派遣した者及び参加者　26 人

派遣した者：徳島市在住の造園師　２人　　徳島市総務部総務課職員　１人

参　加　者：NPO 法人 Japanese Cultural Center & Tea House メンバー及び管理人
造園師（サギノー市等）、マスターガーデナー、ボランティア

合計　２３人

⑶　事前打合せ

徳島市からサギノー市へ造園師の派遣を行う前に、写真や図面等をやりとりし、サギノー市ＮＰＯ法人及び造園師と、研修指導する箇所及び内容、研修指導に必要な資材及び道具についての綿密な打合せを行った。

また、徳島市においては、茶室（阿波鷺能庵）を建設した建築家と今回派遣した造園師とで事前打合せを行い、茶庭建設における過去の経緯等の再確認を行った。

４．事業内容（研修・指導内容）

１日目（９月２２日）

－講　義『茶庭について』－

今回の造園技術の指導は、茶庭を中心に行ったため、茶庭とは何か、茶庭にはどのような役割があるのか、そしてその景物（飛び石、蹲踞、四つ目垣、枝折戸等）の役割についての講義を行った。

そして、「茶庭の存在意味について」理解を深めてもらい、その「茶庭」が「茶室」の存在価値をさらに高めるものであり、その維持管理を行っていくことの重要性を理解してもらった。また、日本での庭仕事への取り組む際の教訓やその姿勢についての講話を行った。

－剪定技術指導－

マスターガーデナーのグループがとても関心をもっているという「日本の剪定技術」について、実地指導を行った。

剪定に関していえば、米国と日本の造園技術に対する考えに大きな違いがある。米国では、木の剪定はあまり行わない。サギノー市造園師によると、剪定を行うのは、枝が病気になったり枯れたり、隣接する建物等との関係で枝が邪魔になったりした時だけであるという。米国では木が伸びたいように自由に育てるという考えに基づき造園を行っている。よって、日ごろから友好庭園の木々の剪定は、あまり行われていなかった。

しかし、日本の造園では、木々に細やかに気を配り、小まめに剪定を行いながら、木の成長を整える。そして、木々はあまり大きく育てず、作庭当初のイメージを守って木を育てていくことが必要である。

サギノー徳島友好庭園は、自然庭園部分と日本庭園部分とで構成されている。よって、自然庭園部分は、アメリカの造園に対する考えで維持管理を行っていく方がよいが、日本庭園の部分については、日本の造園技術に基づき細やかな剪定を行い、作庭当初のイメージを守っていく必要性があることを指導した。

２日目（９月２３日）

－四つ目垣の修復－

２日目の研修は、四つ目垣の修復と茶庭の修復の研修を行った。茶室（阿波鷺能庵）の入口前にある四つ目垣は、茶室が開設された年（昭和 61 年）から一度も修復されておらず、その竹と柱は朽ちて傾いてしまっていた。

サギノー市では、良質の竹を入手することが難しく、またその四つ目垣を修復する技術を持つ者がいなかったため、四つ目垣を修復することができなかった。

今回の修復指導は、この古い四つ目垣をすべて取り除き、ここに新たに四つ目垣と枝折戸を設置するというものであった。

そして、この修復において、必要不可欠な日本の造園技術である「四つ目垣の紐の結び方」は大変難しいものであり、すぐに実践的な結び方はできるものではない。

しかし、この紐がきちんと結べていなかったり、きっちり締まっていなかったりすると、雨水で紐がふやけ緩み、四つ目垣が傾く原因となるため、研修最終日に、四つ目垣の模型を作製し、修復時に必要となる「紐の結び方」をフォローアップ指導として、現地スタッフに徹底的に練習してもらった。

－茶庭の修復－

茶庭の修復指導ついては、①排水の修復、②蹲踞のまわりの修復、③飛び石の修復を中心に修復指導を行った。

排水の修復については、マスターガーデナーが中心となり行った。この排水は、日本の数寄屋造建築の特有のものであり、日本でもあまり見ないものである。これは、軒から落ちる雨水のための樋の代わりをしており、排水として機能するものである。

しかし、茶庭から大量に流れ込んだ土のため、地中に埋まってしまい、その役割を果たしていない状態であった。

この修復技術は、大変簡単なものであり、排水の中にある石と土を分けてかきだし、そしてその中の土を瓦の部分（上部）から 3 cm から 5 cm の深さで均し、取り出した石を戻すというものである。この修復は、人手と手間さえあればできる修復であること、日頃から気をつけてさえいれば、簡単に修復できるものであることを指導した。

蹲踞まわりの修復については、築山から蹲踞まわりに緑がないため、土壌が見えていしまっている状態であった。

また、築山に植物がないため土が茶庭全体に流れでて、蹲踞の中まで流れ込んでいた。

これに対する解決策として、ハイビャクシン 12 株を植栽し、土止めとなるよう植栽の配置について指導を行った。

日本の植栽方法は、不等辺三角形を基本イメージとして行い、少ない株数で植栽を行い、より多く植わっているように見せること、そして今回の場合は、このハイビャクシンが土止めとなり、蹲踞の中に土が流れ込まないように配慮して位置を決め、全体のバランスを考え植栽することを指導した

飛び石については、毎年の豪雪の重みと、築山から流れ出て土のため、飛び石が地中に埋もれていたため、その機能を果たしていなかった。

よって、飛び石の周りの土をかき出し、正しい高さに飛び石を戻し、常にこの高さを保つよう、常に飛び石の周りの土を調整するように指導を行った。

【指導を行う前の茶庭】

【指導を行った後の茶庭】

３日目（9 月 24 日）

－フォローアップ指導　『四つ目垣』『飛び石』－

１日目・２日目は、徳島市造園師とともに茶庭には欠かせない景物（四つ目垣、飛び石、蹲踞、排水等）の修復を行うことで、それらに求められる日本の造園技術の習得に力を注いだ。３日目は、そのフォローアップとして、修復した景物をサギノー市スタッフで、常に維持管理し、修復が必要になったときは自分たちで修復できるように、四つ目垣に関しては模型を造り、日本特有の造園技術である「四つ目垣の紐の結び方」についてフォローアップ指導を行った。

しかし、この紐の結び方は大変特殊なため、実践的な結び方できるようになるまでには、

相当の練習が必要である。よって、今後も引き続き技術習得を課題とし、平成２１年度も取り組む予定である。

飛び石については、新たにサギノー市スタッフだけで飛び石を作製した。これは、本来の飛び石があるべき高さ、石と石との間隔等について、その修復時に必要となる飛び石の基礎知識及び理論について、理解を深めてもらうためにファローアップ指導として行った。

５．事業の成果と今後の課題

日本の造園技術のすべてを短期間で伝受することは不可能であるが、サギノー徳島友好庭園にある景物について必要な技術だけを、重点的に習得してもらえば茶庭の維持管理は行っていくことができる。そして、その茶庭が本来、果たすべき文化的意味や機能について、理解してもらった上での維持管理を行えば、その手入れについても今まで以上にサギノー市スタッフによる熱意ある庭園維持管理を行っていける。

今回の事業実施において、徳島市造園師とサギノー市スタッフがと共に日本庭園の修復を行ったことで、サギノー市スタッフの友好庭園に対する維持管理への熱意がさらに増し、『日本文化の発信の拠点地であり、友好のシンボルである』この友好庭園の存在価値を改めてサギノー市スタッフが再認識し、今後この古き歴史ある施設を大切に守って行かなければならないという意識的向上にも繋がった。

また、今後の課題として、技術面では「石組補修の仕方」について取り組む予定である。この石組においても、日本人の美的感性からなる配石理論について、サギノー市スタッフに理解してもらう必要がある。

今年度、実施した剪定技術指導から分かるように、米国と日本では造園に対する考えに相違点がある。米国の造園では、樹木は自然のままに、木が伸びたければ伸ばすという考えのもと、本来のあるがままの姿で樹木を育てていく。その一方、日本の造園では、きめ細やかに樹木に目を配り、剪定を行い、樹木の美を引き出し、ある一定の形を保っていく。

どちらの文化においても、樹木を大切に育てていきたいという考えは共通のものであり、視点が違うだけである。こうした両国における造園に対する違いを理解してもらい、日本庭園の維持管理に取り組んでもらえるよう説明する必要性がある。

平成 21 年度は、石組補修を中心に指導を行う予定であるが、その理論と石組における日本の造園における考えを理解してもらいながら、修復技術を指導することに主眼を置き取り組む。